

修士論文（概要）

「ニューカマーのための外国人学校と日本語教育

X市ペルー人学校におけるエスノグラフィーを通して」

坂田 麗子

1. 問題の所在と目的

1990年の出入国管理法の改正以来、ラテンアメリカからの出稼ぎを目的とした在日日系人が急増し、滞在の長期化から就学年齢にあたる子どもの数も増加した。2004年現在、ニューカマーの一構成員を成すラテンアメリカ諸国から来日した出稼ぎ労働者の子どもたちは、不就学の子どもを除き、日本の公立の学校や、ブラジル人学校・ペルー人学校といった外国人学校に通っている。日本の小中学校では、ニューカマーの適応、教科、母語指導などの問題が早くから問題視され、その研究が年少者日本語教育において行なわれてきた。しかし、外国人学校では、外国人学校の現状やそこで生じる問題自体が明らかではないため、日本語教育における研究が行なわれてこなかった。

このことから、本論文では、ラテンアメリカからの出稼ぎ労働者の子どもを対象とする外国人学校に限定し、そこにおける日本語教育の不在を問題の所在としながら、ニューカマーの外国人学校における日本語教育の構築を試みることを目的とする。そのために、まず理論研究としてニューカマーの外国人学校における日本語教育とは何かを考察し、次にニューカマーの外国人学校を従来取り上げられることのなかったX市ペルー人学校をフィールドにして明らかにしていきながら、X市ペルー人学校における日本語の授業実践を検証することで、ニューカマーの外国人学校における日本語教育とは何かを追究する。

研究方法は、ペルー人学校という「未開社会」を捉えること、そして筆者が日本語教師として直接関与する日本語の授業を検証することの二つの観点によるエスノグラフィーから成立する。フィールド・サイトは群馬県X市にあるペルー人学校で、期間は2003年3月17日から2004年11月24日であり、対象はペルー人学校の児童生徒、教師、保護者である。その期間における日本語の授業や学校行事、また2004年8月30日から9月14日の16日間における泊り込み調査から完全参与型の参与観察とインタビュー調査を行なった。データ保存方法は、筆者自身が唯一のツールであり、参与観察やインタビューはフィールドノートにその都度書き留めた。

2. 理論:ニューカマーの外国人学校における日本語教育

1990 年後半から、子どもの母国でのシフトに合った教育や母語保持のために、ブラジル人学校が設立され(小内 2003b)、今日では、日本の公立学校を断念して通う子どもや不就学の子どもの居場所の機能も果たすようになっている。このような外国人学校に通う子どもが多様化する中、外国人学校では日本政府による問題があり、外国人学校は正規の「学校」ではないため中卒や高卒の資格を得ることができない(小内 2003b、今津・松本 2002)。次に、教育環境と教育運営の問題があり、外国人学校は自治体や企業からの財政支援がないことから授業料が高く、学校の土地や建物を確保することが困難である。また、児童生徒の転出入が多く、その都度教員や教材の確保や、カリキュラムの調整に追われている(今津・松本 2002)。その他には、子ども自身が抱えさせられている問題で、学校や国の行き来によって学習困難やアイデンティティの問題を抱えている。

これらの問題から、ニューカマーにおける外国人学校は、日本における出稼ぎ労働者の社会構造のもと、日本政府、子どもの親、エスニック・コミュニティが各々抱える問題と深く結びつき、それが子どもの抱える問題に悪影響を及ぼしていることが明らかになった。この複雑で絡み合った問題を改善していくためには、国の出稼ぎ労働者への体制や、ニューカマーの教育体制からの外側からの改善をただ待つのみではなく、ニューカマー自身への教育によって教育問題を改善していくことが重要である。そして、その教育とは、子どもが他者と関わりを持ちながら自己変容をし、様々な問題を乗り越えていけるような社会変革を目指した教育である。ニューカマーのための外国人学校における日本語教育とは、多文化教育の理念のもと、自己変革・社会変革を目的とするものであり、人との関わりによって学習を促進しながら、子どもが地域社会とエスニック・コミュニティの架け橋となることなのである。

このような日本語教育の理念のもと、具体的に行なっていく方法として総合学習に基礎をおいた日本語教育を提案した。総合学習とは、教科の枠組みや境界にとらわれずに、テーマやトピックのもと、自らを取り巻くさまざまな環境との直接的具体的な関わりや体験活動を通し、その子の興味や関心や気づきを大切にしながら、問題解決を行い、「その子自身の学び」をつくり出し実践していく学習である。その学習を日本社会で日本語を通して行なうことで、外国人学校における日本語教育の理念であげた、地域社会とエスニック・コミュニティを結ぶ役目を果たすことができるのではないだろうか。

3. 実態調査

3-1 X市ペルー人学校

X市ペルー人学校は1999年に日系2世のL氏によって開設された。在籍する子どもは22名で、4歳から16歳の子どもが幼稚部、小学部、中学部の3つのクラスに分かれている。教員は、日系人の校長先生とI先生、そして筆者の3名である。授業は9時から昼休みをはさんで4時までであり、授業内容は、ペルーの教育省が認可する通信教育のカリキュラムにそってスペイン語によって授業が行なわれている。

調査の結果、X市ペルー人学校では、日本政府の位置づけと出稼ぎ労働者の親の狭間で、経営難や教員の雇用、学校環境、児童生徒の転出入の変動、地域社会やペルー人コミュニティとの関係など深刻な問題を抱えていることが明らかになった。そして、子どもの将来のために学校は存在するにも関わらず、そこに通う子どもたちの将来が保障されていない現状があった。子どもの自己改革と社会変革を目指した教育が校長先生による絶え間ない努力が行なわれていながらも、学校の経営難や親の教育観、日本政府の力に押され、うまく改善に結びついていないことが実態調査で明らかになった。

3-2 X市ペルー人学校の日本語教育

2003年3月から2004年8月まで行ってきた日本語の授業から、日本語の授業の問題は、第一にカリキュラムにおける問題があり、子どもの背景が異なることで日本語のレベルが全く異なるため、ひとりひとりのニーズに合った授業内容を設定することが困難であり、また転出入が激しいことから予定学習期間を設定することや、人数を想定した準備を行うこと、毎回の授業内容を継続することができない。また、週に一度という限られた日本語の授業の中で、日本語の習得をはかることが難しい。次に、運営面の問題があり、人手が足りないことや空き教室がないこと、教室内の冷暖房の設備が整っていないことから、学習環境が劣悪である。その他には、教師の時給が低く、支払われないことがある中で、子どもに配布するプリントの作成費やコピー代等が全て教師の負担となる。最後に、日本語の授業における子どもの問題があり、子どもは日本語を学ぶ必要性を感じておらず、このことは宿題や授業態度に影響している。そして、学校に編入する以前の体験や親の背景などの原因によって子どもは精神的な問題や言葉、学習面の問題を抱えている。また、幼稚部や小学部は、勉強道具を持ってこなかったり、殴り合いのけんかが始まったり、人から借りたものを返さなかったり失くしてしまうといった授業を受ける以前の問題があった。

以上から、ペルー人学校における日本語の授業は、ペルー人学校における日本語教育の

目的や方法の不在と、出稼ぎ労働者の社会構造を根底にしたペルー人学校における問題が影響し合い、問題が肥大していることが明らかになった。このことは、カリキュラムを改善しても日本語の授業が改善するとは限らない可能性を示唆している。この問題を解決していくためには、日本語の授業においてもペルー人学校における教育のあり方とともに、学校における問題と向き合いながら教育を施していく必要がある。そのためには、日本語の授業を継続し、児童生徒との信頼関係を築いていきながら、児童生徒一人一人に適した日本語教育を追求することと同時に、学校の問題を考慮した授業を行っていく必要がある。そして、授業内容の継続による児童生徒の学習を確保していきながら、児童生徒に日本語を学ぶ意味を考えさせていくことが重要である。ペルー人学校における日本語の授業は、ペルー人学校における自己変革・社会変革とともに立ち上がる必要があり、ペルー人学校の問題への施策を補い、また支える役目を果たす可能性を持っているのである。

4. X市ペルー人学校における授業実践

前述したX市ペルー人学校における実態調査のもと、2004年9月1日から11月24日に行った幼稚部、小学部、中学部の三つの日本語の授業を授業実践とし、三クラスの児童生徒の日本語を学習する意欲、日本語の学び、また彼らが抱える問題の三つの観点から実践期間における変化を検証した。その結果、幼稚部は振る舞い方や人との関わり方に問題があり、小学部は他人に対して無関心であること、中学部は問題から逃れ、視野を広く持たないことに問題があることが明らかになった。この段階別の子どもが抱える問題は、発達段階的に抱える問題とともに、家庭やその社会が、日本における彼らの社会構造と強く結びついていることがいえる。このことから、ペルー人学校における日本語教育は、日本における彼らの社会構造を理解した上で行っていく必要があることが、本実践によって実証することが可能となった。本実践は、日本語教育を検証したのではなく、日本語教育を行うための社会を検証したことになった。これは、日本語の授業がどうであったか、子どもの言語活動がどうであったか、既習の日本語をどう応用させるかなどの検証のレベルには達することができなかったことを表している。しかし、教師の児童生徒たちとの関わりや、日本語の授業における変更点、授業の内容の変化によって児童生徒たちの日本語に対する意欲を向上させ、日本語の授業の基盤を作ることができた。意欲が向上した児童生徒に、今後どのようにその意欲を継続させ、言語活動や学習、生活で抱える問題などに絡めて授業を展開していくことができるかが、本実践においての重要な課題である。

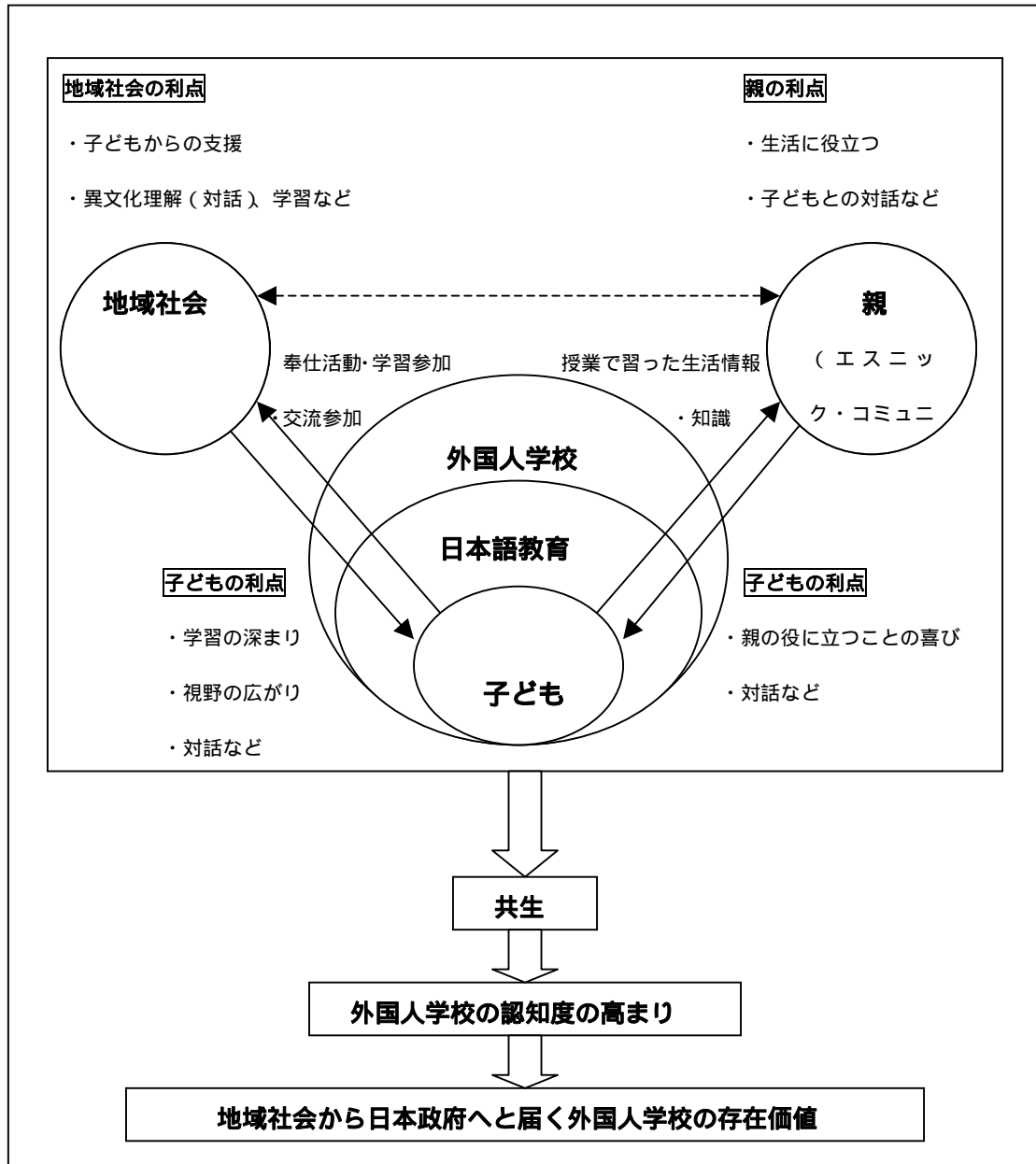
総合学習に基礎をおいた日本語教育に関しては、本実践では子ども自身が学びたいことを自らが学ぶのではなく、自ら学びたいことを教師によって学ばせていたことから、総合学習における理念とは異なった見解になった。しかし、このことが総合学習に至らなかった点ではない。むしろ、そこに言語教育の意味がある。言語が異なる環境で自らが学びたいことを学ぶことは、まずは異なる環境の言語の最低限の基になる部分が理解できる必要がある。その基を言語教育によって育成しながら総合学習の要素を含めた活動を行っていくことで、教師ではなく子どもが自ら学んでいけるような力を育てていくことができるのではないだろうか。本実践では、総合学習において言語教育を上手く取り囲んだ上での実践を行うまでには至らなかったが、それを行なうための環境を整える段階までには達することができた。総合学習における日本語教育とは、どの環境においても、自らの学ぶ力を育成することができるために、総合学習的な要素を含めながら言語教育を行っていくことなのである。

5. 結論

本論文では、ニューカマーの外国人学校における日本語教育を構築するために、ニューカマーの外国人学校における日本語教育を理論研究から検証し、さらにペルー人学校の実態を捉えながらペルー人学校における日本語教育の実践を行なった。その結果、外国人学校における日本語教育の重要性が明らかになり、ニューカマーの外国人学校における日本語教育は、自己変革・社会変革のために子どもがエスニック・コミュニティと地域社会の間の架け橋となる可能性を示唆した(図1)。このことから、本論文では、外国人学校の日本語教育の構築に向け、日本語教育の理念を掲げたこと、それを本実践において地域社会に働きかけることまでには至らなかったが、児童生徒の学習する意欲の変化や日本語の授業の施策によって社会に働きかける体制を整えることができたこと、本実践においてエスニック・コミュニティの構成員である子どもの親に日本語の授業によって子どもが働きかけることができたことがいえる。しかし、外国人学校の日本語教育の理論に基づく方法とし、理論研究において総合学習を基礎においた日本語教育を提案したが、本実践においては具現化するまでには至らなかった。今後は外国人学校における日本語教育の理念に基づいたさらなる実践研究による検討が必要である。

今後もニューカマーのために外国人学校における日本語教育の研究を進めていきたい。

図1



<参考文献>

- 荒木紀幸(2002)『総合学習を生かすマニュアル』明治図書
- 池上重弘(2001)『ブラジル人と国際化する地域社会 - 居住・教育・医療』明石書店
- 池上摩希子(1999)「実践報告 センター小学校低学年クラスにおける算数プログラムの設計」『中国帰国者定着促進センター紀要』7号
- 今津孝次郎・松本一子(2002)『東海地域の newcomer 外国人学校増補改訂版』名古屋大学大学院国際開発研究科・教育発達科学研究科今津ゼミ
- ウィリス、P(1996[1977])『ハマータウンの野郎ども』(熊沢誠・山田潤訳)ちくま学芸文庫
- 江成幸(2002)「第4章『定住化』と『共生』をめぐる課題 ラテンアメリカ出身日系人」駒井洋編『国際化のなかの移民政策の課題』明石書店
- 江淵一公(1993)「異文化間教育と多文化教育」『異文化間教育』異文化間教育学会 1993 7号 アカデミア出版会
- (1994)『異文化間教育学序説 移民・在留民の比較教育民族誌的分析』九州大学出版会
- 江淵一公編(1998)『トランスカルチュラルイズムの研究』明石書店
- 小内透・酒井恵真(2001)『日系ブラジル人の定住化と地域社会 群馬県太田・大泉地区を事例として』御茶の水書房
- 小内透(2003a)『在日ブラジル人の教育と保育 群馬県太田・大泉地区を事例として』明石書店
- (2003b)「在日ブラジル人の教育問題 群馬県太田・大泉地区の実態をふまえて 第6章 移民の教育問題」駒井洋監・石井由香編『移民の移住と生活』明石書店
- 岡宗子(1976)「西町インターナショナル・スクールにおける日本語教育」『日本語教育』30号
- 岡崎眸(1994)「内容重視の日本語教育 大学の場合」『東京外国語大学論集』49号
- 岡崎洋三・西口光一・山田泉編(2003)『人間主義の日本語教育』凡人社
- 奥田道大(1997)『都市社会学研究 都市エスニシティの社会学 民族/文化/共生の意味を問う』ミネルヴァ書房
- 小澤浩明(2001)「現代日本の社会階級・社会問題とブルデュー社会学理論」状況出版編集部『ブルデューを読む』状況出版

- 恒吉子 (1996) 「第 7 章多文化共生時代の日本の学校文化」堀尾輝久『講座学校 学校文化という磁場』柏書房
- 加藤幸次 (2000) 『総合学習の思想と技術』明治図書
- 金子勇 (2001) 『都市社会学研究 都市化とコミュニティの社会学』ミネルヴァ書房
- 川上郁雄 (1999a) 「『日本事情』教育における文化の問題」『21 世紀の日本事情 日本語教育から文化リテラシーへ』くろしお出版
- (1999b) 「オーストラリアのマルチカルチュラルリズムと日本語教育」『宮城教育紀要』第 34 巻
- (2001a) 『越境する家族 在日ベトナム系住民の生活世界』明石書店
- (2001b) 「転換期の日本語教育」『宮城教育大学紀要』第 35 巻
- (2002) 「第 6 章 年少者のための日本語教育」細川英雄 (2002) 『ことばと文化を結ぶ日本語教育』凡人社
- 川上郁雄・石井恵理子・池上摩希子・齋藤ひろみ・野山広 (2004) 「年少者日本語教育学の構築に向けて 『日本語指導が必要な子どもたち』を問い直す」『2004 年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 神部秀一 (2002) 「実践報告 ブラジル人学校『ピタゴラス』との交流 国際理解総合学習の試み」『群馬県太田・大泉の小中学校国際化の実態と求められる教員資質の総合的研究』
- グラント,C,A、ピリング,G,R 編 (2002) 『多文化教育事典』(中島智子他監訳) 明石書店
- 古賀正義 (2001) 『認識と文化 1 2 教えることのエスノグラフィー』金子書房
- 駒井洋編 (2003) 『多文化社会への道』明石書店
- 駒井洋監修、石井由香編 (2003) 『移民の移住と生活』明石書店
- 駒井洋・広田康生 (2001) 『多文化主義と多文化教育』明石書店
- 齋藤亨子 「オーストラリアにおける『異文化間教育としての外国語教育』カリキュラム開発の論理 ALL ガイドラインの検討を中心に」『日本語教育』107 号
- 齋藤ひろみ (1998) 「内容重視の日本語教育の試み 小学校中高学年の子どものクラスにおける実践報告」『中国帰国者定着促進センター紀要』6 号
- 佐伯胖・佐藤学・宮崎清孝・石黒広昭 (2003) 『心理学と教育実践の間で』東京大学出版会
- 佐藤郡衛 (2001) 『国際理解教育 多文化共生社会の学校づくり』明石書店

- 佐藤郁哉 (1992) 『フィールドワーク：書を持って街へ出よう』新曜社
 (2001) 『暴走族のエスノグラフィー』新曜社
 (2002) 『フィールドワークの技法』新曜社
- 状況出版編集部 (2001) 『ブルデューを読む』状況出版
- 志水宏吉編 (1999) 『教育のエスノグラフィー』嵯峨野書院
- 志水宏吉・清水睦美 (2001) 『ニューカマーと教育 学校文化とエスニシティの葛藤をめぐって』明石書店
- 柴山真琴 (2001) 『行為と発話形成のエスノグラフィー 留学生家族の子どもは保育園でどう育つのか』東京大学出版会
- 新海英行・加藤良治・松本一子編 (2002) 『新版 在日外国人の教育保障 愛知のブラジル人を中心に』大学教育出版
- 末藤美津子 (2002) 『アメリカのバイリンガル教育 新しい社会の構築をめざして』東信堂
- 杉浦美朗 (1984) 『デューイにおける総合学習の研究』風間書房
- 鈴木江理子・渡戸一郎 (2002) 「日本における多文化主義の実現に向けて PART 2 地域における外国人との共生に関する基礎調査」『地域社会の国際化に関する調査』フジタ未来経営研究所
- 関口知子 (2003) 『在日日系ブラジル人の子どもたち』明石書店
- 瀬戸真 (1991) 『道徳性の育成を目指す授業実践の改革』第一法規出版
- 高浦勝義 (1997) 『総合学習の理論』黎明書房
- 竹内通夫・加藤仁実 (1999) 『ピアジェの発達理論と幼児教育 ピアジェが、私たちに投げかけたもの』あるむ
- 田島久歳 (1995) 「第6章ラテンアメリカ日系人の定住化 出身国別の一考察」駒井洋『講座外国人定住問題第2巻 定住化する外国人』明石書店
- 田尻英三・田中宏・吉野正・山西優二・山田泉 (2004) 『外国人の定住と日本語教育』ひつじ書房
- 田中里奈・牲川波都季 (2003) 「識字教育と日本語教育を結ぶための文献紹介」研究ノート『リテラシーズ ことば・文化・社会の日本語教育へ』1号 くろしお出版
- デューイ, J (1998) 『学校と社会・子どもとカリキュラム』(市村尚久訳) 講談社
- 寺西和子 (2000) 『総合学習の理論とカリキュラム』明治図書

- 長沢房枝 (1986) 「在日インターナショナル・スクールにおける日本語教育 ASIJ を中心に」 『日本語教育』 58 号
- 中尾桂子 (2003) 「第 6 章 『子どものための日本語』 指導」 岡崎洋三・西口光一・山田泉 『人間主義の日本語教育』 凡人社
- 中島和子 (2002) 『バイリンガル教育の方法 12 歳までに親と教師ができること』 アルク
- 中島和子・佐々木倫子・津田和男・向野也代・湯川笑子 (2003) 「もう一つの年少者日本語教育 継承語教育の課題」 『2003 年度日本語教育学会春季大会予稿集』
- 中山兼芳編 (2001) 『児童英語教育を学ぶ人のために』 世界思想社
- 西原鈴子 (1996) 「外国人児童生徒のための日本語教育のあり方」 『日本語学』 Vol.15.2 月号
- 西村俊一・岡田要人編 (2004) 『諸外国の外国人学校政策』 全国共同利用施設東京学芸大学国際教育センター
- 人間主義心理学会 (1999) 『人間の本質と自己実現』 川島書店
- 縫部義憲 (1998) 『心と心がふれ合う日本語授業の創造』 瀝々社
(1999) 『入国児童のための日本語教育』 スリーエーネットワーク
- 野元弘幸 (1988) 「パウロ・フレイレ教育論の研究 - 1 - パウロ・フレイレ教育論の展開と特質」 『名古屋大学教育学部紀要、教育学科』 名古屋大学教育学部 35 号
(2000) 「課題提起型日本語教育の試み 課題提起型日本語学習教材の作成を中心に」 『人文学報 / The Journal of social sciences and humanities』 東京都立大学人文学部 308 号
(2001) 「フレイレ的教育学の視点」 青木直子・尾崎明人・土岐哲編 『日本語教育を学ぶ人のために』 世界思想社
(2002) 「グローバル時代のブラジルの教育」 富野幹雄・住田育法編 (2002) 『ブラジル学を学ぶ人のために』 世界思想社
(2003) 「日系ブラジル人の子ども・大人たちを支える教育協同の輪 愛知県豊田市保見団地でのとりくみ (特集 / 教育の危機からあらたな共同・協同へ)」 『教育』 国土社 教育科学研究会 53 (5) (通号 688)
- 拝野寿美子 (2004) 「在日ブラジル人学校におけるバイカルチュラリズムの可能性 N 学園の事例から」 『異文化間教育学会第 25 回大会』

- バトラー後藤裕子 (2003) 『多言語社会の言語文化教育』くろしお出版
- 原みずほ (2001) 「他言語併用教室の言語使用に関する研究 日本における加算的バイリンガリズムの実現を目指して」 『言語文化と日本語教育』 凡人社
 (2003) 「乗算的バイリンガリズムと支援教室 社会における言語間の権力関係の観点から」 『世界の日本語教育』 13号 2003年9月
- バンクス, J, A (1999 [1996]) 『入門多文化教育』(平沢安政訳) 明石書店
- ピアジェ, J (1972) 『発生的認識論』(波多野完治他訳) 白水社
- 船山久美・宮崎七湖 (2003) 「アシスタントを導入した短期留学生のための日本語プログラム 第1回早稲田高校/メルボルン・グラマー・スクール交換留学プログラムより」 『2003年度早稲田大学日本語教育研究』 3号
- ブルデュー, P、パストン、J、C (1991) 『再生産』(宮島喬訳) 藤原書店
- フレイレ, P (1982[1967]) 『伝説か対話か 関係変革の教育学』(里見実・楠原彰・松垣良子訳) 亜紀書房
 (1984 [1970]) 『自由のための文化行動』(柿沼秀雄訳) 亜紀書房
 (1979[1968]) 『被抑圧者の教育学』(小沢有作・楠原彰・柿沼秀雄・伊藤周訳) 亜紀書房
- 広田康生 (1997) 『エスニシティと都市』 有信堂文社
- 淵上英二 (1995) 『日系人証明 南米移民、日本への出稼ぎの構図』 新評論
- ベーカー、C (1996 [1993]) 『バイリンガル教育と第二言語習得』(岡秀夫訳) 大修館書店
- 本間圭一 (1998) 『南米日系人の光と影』 随想社
- 松尾知明 (1999) 「文化的多元主義から多文化主義へ」 『浜松短期大学研究論集』 55号
- 南澤貞美 (1991) 『自律のための教育』 昭和堂
- 箕浦康子 (2002) 『フィールドワークの技法と実際 マイクロ・エスノグラフィー入門』 ミネルヴァ書房
 (2003) 『子供の異文化体験 増刷改訂版 人格形成過程の心理人類学的研究』 新思索社
- 宮崎猛 (2002) 『進路で作る「総合的な学習」』 小学館
- 宮島喬 (1994) 『文化再生産の社会学 ブルデュー理論からの展開』 藤原書店
 (1999) 『文化と不平等』 有斐閣
 (2003) 『共に生きられる日本へ』 有斐閣

- 宮島喬・石井洋二郎編（2003）『文化の権力 反射するブルデュー』藤原書店
- 宮島喬・島蘭進編（2003）『現代日本人の生のゆくえ つながりと自律』藤原書店
- 矢野裕俊（2000）『自立的学習の探求 高等学校教育の出発と回帰』晃洋書房
- 山本剛郎（1997）『都市社会学研究 都市コミュニティとエスニシティ』ミネルヴァ書房
- 山本薫子（2002）「帰国／定住 ではなく、『居場所を求めて』 ニューカマーのアイデンティティに関する試論」好井裕明・山田富秋『実践のフィールドワーク』せりか書房
- 山本雅代（2000）『日本のバイリンガル教育』明石書店
- 山脇千賀子（1996）「第6章語られない文化のベクトル 沖縄系／日系ペルー人の文化変容」伊豫谷登士翁・杉原達『講座外国人定住問題第1巻 日本社会と移民』明石書店
- 吉岐久子（1988）「年少者に対する日本語教育の現状と課題」『日本語教育』66号
- ロビヤンコ、J（2000）「『ツナミ』の後のジレンマ 多文化的オーストラリアでの日本語学研究」『日本語学・日本語教育学研究 国際シンポジウム報告書』名古屋外国語大学
- 渡辺萬里子（1976）「A.S.I.Jにおける日本語教育の問題点」『日本語教育』30号
- 渡部一郎・川村千鶴子編（2002）『多文化教育を拓く マルチカルチャルな日本の現実の中で』明石書店
- 渡戸一郎・広田康生・田嶋淳子（2003）『都市的世界／コミュニティ／エスニシティ メトロポリス期の都市エスノグラフィー集成』明石書店
- 渡部孝子（2002）「学校と日本語ボランティアとの連携への可能性を考える パラレロ学校での日本語指導を参考にして」所澤潤『群馬県太田・大泉の小中学校国際化の実態と求められる教員資質の総合的研究』平成11～13年度科学研究費補助金基盤研究（B）（2）研究成果報告書